

鎮守府對抗  
提督の棒倒し  
— 金剛編 —  
— 前編 —

FOR ADULT ONLY  
成人向  
FOR ADULT ONLY





「ああ、ん、はあ……ああ、す……い、ああ」

「ああ、ん、もつと……もつと奥まで欲しい」

「ああ、ん、ああ、ズッポリ入ってるうう、ハア」

「はあ、ん、ああ、いいい、ああ、ん、ああ……」

蒸せかえるような女のおいとタバコの煙

それをくゆらせながら椅子に腰かける将校

達と、自ら尻を突き上げ……腰を振る艦娘達の

の淫らな喘ぎ声が……会議室内にこだまする。

戦場に散る全ての艦娘達が、今際の際に懐

く尊き夢……『平和』という名の遠き理想郷。

そして、その意思を誇りと掲げ……その信義

を貫けと糾して指揮を執り、戦場に赴く提督。

だが、残酷にも歪んだ現実が……絶望の戦場

より帰還した彼の眼下に広がっていた。

連合艦隊総指令本部・軍法会議室

「そうやって、あんた達が精液を飛ばしてる

間にも……彼女達は必死に戦っているんだ！」

山本 五十六(二十歳・少将)

青森にて新設された大湊鎮守府に所属する

新進気鋭の若手提督。

元々は横須賀鎮守府に所属していたが、横

須賀鎮守府代表提督であった兄の失脚と戦死

によって、地方の鎮守府に左遷させられた。

秘書艦は『金剛』

「フン、何をぬかすかと思えば……ケツコン

(仮)もしておらぬ青二才がデカイ口を叩くな」

西郷 藏ノ介(三十五歳・大将)

呉鎮守府の代表提督。筋骨隆々の肉体と誇

り高き土佐の武人にして……真性のロリコン。

秘書艦は『雷』

「君は……己の立場を明確に理解するべきだ。

それが、君の兄への償いとなるだろう……」

赤石 総一郎(二十九歳・大将)

横須賀鎮守府の代表提督。山本の兄の同期

でかつての盟友。勝つためには手段を選ばな

い冷徹な性格をした巨乳好きのおっぱい星人。

東郷の計略により戦死した山本の兄に代わ

り、新たに横須賀鎮守府代表提督に就任した。

秘書艦は『武蔵』

「まあ、アンタの粗チンじゃこの状況でも

何もできやしないでしょうけどねえ……うふふ」

柏木 百合子(二十歳・大将)

佐世保鎮守府の代表提督。数少ない女性提

督にして山本の幼馴染で初体験の相手。

現在は心にチンコを持ったガチレズ。

秘書艦は重婚で許可された『天龍・龍田』

「悪い事は言わないから、先輩は田舎で大人

しくしている方がお似合いだよ、アハハッ」

犬塚 勇次郎(十八歳・大将)

舞鶴鎮守府の代表提督。戦略に優れ、男女

ともに人気を誇る美男子。訓練生時代に山本

の後輩であったが、卒業後は東郷の愛人とな

り出世。艦娘とも情事を交わす二刀流使い。

秘書艦は『香取』

「ムハハ、甘いわ山本よ……貴様一人の器量で

この世の全てが推し量れると思ったか？なら

ば、このワシに己が意思を力で示してみせよ」

東郷 平八郎(四十五歳・元帥)

連合艦隊総司令官にして、日本に点在する

鎮守府の頂点に立つ漢。

「鎮守府対抗 提督の棒倒し」

東郷自らが発案したそれは……お互いの秘

書艦に交換セックスをさせ、『どちらかの艦娘

が先に絶頂するか、提督の『棒』を射精によ

って先に倒すか』を競い合うイベントである。

これにおいて、東郷は自身の保有する大口

径の巨根によって、数多くの艦娘達を大破『轟

チン』させ……歯向かう提督をねじ伏せてきた。

秘書艦は『長門』

「急いては事を仕損じるか……まあ、よい、戯

言もそこまでのだ。貴様の判決は次の棒倒し大

会まで待ってやろう。貴様にその気があるの

なら……各鎮守府代表であるこの四天王を打

ち破り、ワシの元まで辿り着いてみるがよい」

こうして、狂った饗宴から解放された俺は  
決意も新たに……ある場所へと向かっていた。  
(すでに国内の造船企業は軍とズブズブの関  
係にある。頼めるとしたらあそこしかない……  
金剛の生まれたあの企業に助力を願うし  
か……そのためにも『あの人』の力が必要だ)  
山本が向かったその先は……帝都郊外の山  
中にひっそりと佇む豪邸。

ここには国内最大手の艦娘製造メーカー  
『天道重工』の創設者にして、日本における  
艦娘製造技術の礎を作った人物『天道和孝』  
が余生を過ごしていた。

天道は薄暗い部屋の中で車椅子に腰かけ、  
老獪特有の怪しげな雰囲気を出していた。  
「会長、この度は突然の来訪をお許し頂き……」  
「稚拙な世事などは無用だ……それで、今更ど  
の面を下げて、この私に何ようかな山本君？」  
この人は俺達が幼少の頃、身寄りの無かつ  
た兄と俺を引き取り……海軍に入隊するまで  
の間に色々と面倒を見てくれた恩人だ。

兄の起こした『二・二六事件』によって、  
会長とも疎遠となっていたが……今の俺は、再  
びこの人に頼らざるを得ないのが現状だった。  
「はい……今日はケツコン(仮)のご報告で……」  
「ほお、君も身を固める決心がついたか？」

『性欲の無い生命体など、最弱にして下劣ッ』  
それが理解できぬなら、すぐ立ち去りたまえ』  
かつて兄と俺は……東郷達の蛮行を止める  
ため、この人に進言した事があったが……その  
時はこの一言で一蹴されてしまった。

だが……今の俺は、あの時と覚悟が違うッ！  
「はい、『金剛』と『棒倒し大会』に出る予定  
です。そのためにも、金剛に大会仕様の大規  
模改装を実装したく、お願いに上がりました」  
「確かに金剛は……かつて外国の先進的な技  
術導入を狙い、純国産では成し得ないという  
屈辱に耐えながらも英国に発注し、我が国に  
迎え入れた言わば試作機だ。そこから得られ  
たデータによって、今日の日本における艦娘  
達の活躍があるわけだが……もはや彼女の試  
作型としての役目は終わったと思うが？」

「いえ、新型技術を試すために生み出された  
彼女だからこそ……新たな技術を迎え入れる  
キヤパステイをその身に備えているのです」  
「んっふふ……君は何が言いたいのかね？」  
「会長、僕の金剛に……新型技術導入のため、  
お力をお貸し願いたいです。ヴィッカーズ  
社へのお取次ぎをいただけませんか？」  
鬼気迫る山本の表情を見渡すと、天道は満  
足げな笑みをこぼし高らかに笑い声をあげた。

「んはははは……これは天啓かもしれぬな。  
ちようど今しがた英国より電報が入ってな、  
社運を賭けた新型技術導入テストのため、金  
剛を貸してほしいそうだ……どうするかね？」  
「そ、それは是非……」

「山本君……だがそれは禁断の技術かもしれ  
んぞ……『ドレッドノート』を作り上げたかの  
企業も……昨今は他国メーカーに押されて焦  
っておると聞く。『窮鼠猫を噛む』追い詰めら  
れたネズミは猫をも噛むという……が、その末  
路はわかっておろう？その覚悟はあるかね？」  
「僕、自身も……そのネズミの一匹ですよ会長」  
「ふっ、そうか……では、向かわせたまえ。君  
の金剛が英国より持ち帰った力が、どのよう  
な福音を我が国にもたらすのか……楽しみだ」

一週間後……英国行旅客船・船着き場

「HEY提督ウ、それじゃ行ってきま〜ス♪」  
「ああ、久しぶりの里帰り気を付けるんだぞ」  
「パワーアップして帰ってきたら結婚式だよ、  
向こうにいる間に浮気はNOなんだからネッ」  
「分かってるよ。だから早く帰って来てくれ」  
「OK〜♪ん、チュッ……」  
俺達は夕暮れの栈橋で、どちらからともな  
く近づくと……誓いの口づけを交わした。

HEY

提督ウー！

やっと本当の私に  
なれた気がシマース



数週間後……

『警告、警告、所属不明艦娘が我が鎮守府に向け急速接近中……ドックに緊急入渠します』

早朝、けたたましい警報のサイレンが大湊鎮守府に響き渡ると共に衝撃波が施設を襲う。

「一体何事だこれはッ!? 状況を報告しろ!」

水柱を起てながら屋外ドック(露天風呂)に着水し、たちこめる霧の中から現れたのは……

「ふう〜長旅の疲れもこれでパッチシ回復♪ スベスベ湯上り卵肌ネ〜♪ H E Y 提督ウー! やつと本当の私になれた気がシマース♪」

(あらやだ金剛……そんな、乳まで変わって……)

そこには……出港前より随分と乳の育った『ふるるんマシユマロボディ』の金剛がいた。

プシャー……ッ……バタッ。

「あつ、て、提督う!?!? す、凄い鼻血デース! メデイーク!! 提督う大丈夫ですかあ〜!?!」

俺は薄れゆく意識の中で、金剛のデカ乳に顔をうずめながら……俺達の勝利を確信した。

「あつ、気がついたデ〜ス♪もう、提督う〜 あんなに鼻血を出して……心配したヨ〜」

目を覚ますと『普通の金剛』が、ベッドの横でかいがいしく俺を介抱してくれていた。

(あれ? さっき見た金剛はいったいどこに?)

「あ、そう言えば提督う〜グディ達からユーガットメール♪ラブレター……では無いから安心ネ♪それと、提督に Presentation!」

(映像電文? 英国からのビデオメッセージか……それと、プレゼントが弾薬ケース?)

ピチューン……

「ハハッ H E Y、ボーイ♪久しぶりだナァ、元気にヤツてるカイ? オオウ預かてったコン

ゴウはじつに『イイ女』に仕上がったゼ〜」

このガチムチのタンクトップが似合う日焼けした髭ダンディーはジョージ・テイラー。

金剛の開発者で自称かなりの日本通(らしい)

これでもヴィッカーズ社社長の義弟で、技術開発部門の局長を務める叩き上げの職人だ。

金剛の胡散臭い英語混じりの喋り方は……

開発者でもある彼の影響が大きいらしい。

「Oh〜それはモウ『B O N キュッ B O N』のビッグでナイスなマシユマロボディに……」

「ああ、もういいですよ……おじさん。ここから先は僕が話しますから……ああうん、コホン」

画面に割って入ってきた金髪に細いメガネのイケメンはエドワード・ヴィッカーズ。

ヴィッカーズ社社長の息子にして専務。

今回の金剛改修計画の総責任者でもある。

切れ長の瞳に眼鏡……『インテリ眼鏡』とは

彼のためにあるような言葉なかもしれない。

「やあ〜山本提督。この映像を君が見ているという事は金剛は無事に入港できたようだね」

(ああ、露天風呂を『大破』されたけどな……)

「では、今から順を追って詳しく説明しよう。まず、君が最初に見た金剛こそ今回の成果……

『人型自在戦闘装甲艦・金剛改二レベル99 スーパーモード』だ。これは艦娘のコアであるバトルシップソウルに直接成長を促す我が

社の新開発機関『マキシマム・システム』を

オーバードライブ状態にする事で……艦娘のレベルと身体能力を一時的にはあるが飛躍的に上昇させるというシステムだ。ただ、今

回は試作段階ということもあり……その稼働

時間は臨界状態で3分が限界とされている。

今、彼女が元の姿に戻ってしまったのは……英

国から日本までの渡航用のエネルギーが切れ

てしまったからだろう。後は君への受領が完了した証として、彼女のアクセスキーを解放

してやってほしい。解放の仕方は……子宮に直

接、君のデータを入力すれば完了だ」

(つまり……金剛に中出ししろというわけか。

ん〜どうにも回りくどい言い方をしてくれる)

「そうすれば、金剛は改二の姿で君に引き渡せるだろう。ただ、スーパーモードにするた

めには……彼女の性欲を『極限』にまで高めなければ発動はできないから気を付けてくれ」

(なるほど……あれは最後の切り札という訳か)

「だが、我が社もこのシステムに社運をかけている。最近では他国の造船技術も飛躍的に進歩していてね……特にドイツは強敵だ。だが、このダイナマイトボディが他の艦娘達にも普及できれば……形勢は覆る。大会には我々も来日させていただくから、安心してくれたまえ。あ、あと……これはささやかではあるが、君達の門出に……我々からのせめてもの贈り物だ」

『マカビンビンEX・エクストラバースト』

「これは弊社で開発した『艦娘にも効く』催淫作用のある強力な精力剤だ。ドーピング検査で本戦では使えないだろうが……まあ、金剛との夜戦演習においてきつと役に立つだろう」

(この弾薬ケースはそのためのモノかあ？うわあ、ケースの中にびっしりとドリンクが入ってる……これ、本当に全部精力剤かよ?)

「ネエ、提督うそそろそろデートに行くネ」

ヴィッカーズ社からの説明も終わり、俺達

は久しぶりに二人っきりで出かける事にした。

「なあ、金剛、久しぶりに日本に帰国したんだ、どこか行きたい所とかは無いのか？」

(といつても……こんな田舎の軍港じゃさして行ってみたいような場所もないか……)

(オウ、あれは『英国館』ですか……提督にも

英国気分を体験してもらいたい機会デス)

「提督ウ！私あそこに行ってみたいデース」

「ふうん……こんな所に『英国館』かあつて、

ここは『ラブホテル』じゃないかあ！？」

「Oh、中もなかなかオシャレな所デース」

あ、ゴージャスなティーセットもありマース」

部屋の内装に終始ご機嫌な金剛をよそに、

俺はベッドに腰掛けガチガチに緊張していた。

(おい、どうする俺……こんな事でビビって

たら大会なんて勝ち残れないぞッ！？落ち着

け……ま、まずは、お茶でも飲んで落ち着こう)

ガチガチに緊張していた俺は……金剛の入

れてくれた紅茶を一気に飲み干した。

(ウッ、紅茶の中に何か入ってたのかコレ!?)

膝に力が入らず、朦朧とした視界からふと

テーブルに目を向けると……そこにはマカビ

ンビンEXの空き瓶がいくつも転がっていた。

「イツツ！バアーニングウ・ラアアブウ……」

「oh~yeah~♪はむう、アアハーン」

俺は……股間にむず痒さを感じてゆっくりと目を開ける。すると……そこには、金剛が乳

房で既に勃起している俺の肉棒を挟み、タブ、タブと上下にしごきながら包み込んでいた。

拙いながらも硬く起立した俺の肉棒を舌先

でべろりと舐め上げながら刺激していく。

先からあふれ出る『先走り汁』を丹念に舐

め取り……自らの唾液を亀頭に塗布していく。

「キヤーツ……金剛さんッ、何やってんの!？」

「へい提督うこの私に欲情しましたか？」

(いや、ちよつと待て……だが、しかし、これは

目を覚まし、意識した事により……俺の息子

はより一層の硬さと膨張を果たすことになる。

「Oh!？フッフ、提督のココは今日も元気

ネ♪ほらあ〜ペロペロしてあげマース♪」

吹き出すような俺のカウパー液がこぼれ落

ち、テラテラと金剛の胸を徐々に汚していく。

「ワアオ……フッフ、私が全部綺麗にするヨ」

「うっ、いいぞ金剛……そう、こつちを見なが

ら、そのまま下から裏筋を舐め上げる様に……」

「Yah……こうですか？ペロペロ、れろお〜

「ううう、そうだ……いいぞ金剛、うまいな……

これも近代化改修で教えてもらったのか？」

「イエース♪ダディに『傾棒術』をいっぱい

教えてもらったデース♪男を悦ばせるテクニ

ックをいっぱいココ(頭脳)にインプットして

もらいましたネ♪はあむう、おおうイエース」





たぶん、たぶんツ……じゆるじゆるじゆる。

「はあむっ……じゆりゆ、じゆちゅツ……」

ねつとりと男根に絡みつく金剛の舌と胸が大きく前後に動き、その激しさを増していく。

「んっ、うんんくぶはあ、じゆる、じゆる、じゆる……ん、ん、んんむう、ニユブ、ニユブ……んぐっ、ああ、ハア、はむッ、ああ」

「ああ、いいぞ金剛。そうやってもつと舌先で砲身の先を舐め回しながら形をもつと……

ああ絡みつく柔らかさが気持ちいいぞ……」

その乱れた髪と、情欲におぼれる彼女の瞳が……俺の男根をさらにタクマシクさせる。

「はあむ……はあう、ああむ……んんっんんっんツツじゅぶじゅぶじゆるじゆるじゆるツ」

じゆるツじゆるツじゅブブブツ……唾液を絡ませながら山本の肉棒をすすり上げるようにしゃぶる金剛は……おっぱいに唾液でヌルヌルになった肉棒を再び挟み込むと、

胸の谷間から顔を覗かせる亀頭の先端部分を『ちゅば、ちゅば』と吸い上げていく。

英国仕込みの……激しくも情熱的な奉仕と、ゆるやかな『とこ舐め』の舌使いに……俺の肉棒が何度もビクッビクツと震え出していく。

ぶるん、ぶるん、たぶん、ぶるん♪

たゆん、たゆん、たゆん♪

たゆん、たゆん、たゆん♪

ムニムニと俺の目の前にあるおっぱいが……まるで水風船のように形を変えながら

時にチンポに纏わりつき、時に激しく上下にたゆんたゆん、ぶるんぶるんと跳ねた。

「んっばんっば……ちゅくちゅばツちゅく」

胸の谷間から時折這い出す亀頭の先端部分を舌で愛撫し、それをまた胸の谷間の奥深くへと引きずり込んでいく。射幸心をそその

の光景に、俺の砲身ももう我慢の限界だった。

「んぐう……ハアああ……んんツ、ンンツ」

ジュルル、ジュボジュボジュルル……「ぐあああああ、いい、気持ち良いぞ金剛、このまま、このまま最後まで吸い出すんだツ」

「んんうんんくチュジュルルウウウ！」

「うあああ、出るツ……イ、イクぞおおツ」

どびゅっ、ドビュッ……ピュクルツ……「ホワツツ!? Oh……Splashネッ！」

ドビュ、ドブツ……ドブツ……びゅくツ……まだまだ率丸に残る卵白のようにネットリとした濃厚な精液を……金剛はじゆるじゆると音を立てて飲み干していく。

「ああん……んんっ、んツツ、ぶはあ♪いっぱい出てきますヨ……はあむ、チュル♪んくぶはあ……ああ、フフツツoh、提督のディ

ックは留まる所を知らないデースネッ♪

はああむ、っんん、じゆるるる、ペロツペロツペロツ……んくじゆるツじゆるるるるう」

精液を口元にたらしながら妖艶な笑みをうかべる金剛は……口いっぱい射精されても

萎える事の無い山本のモノを啜え込みつつ、ロリポップキャンディーでも味わうかのよう

に……ペロペロとその亀頭を舐め回していく。

そして、金剛は射精を促すようにその胸の谷間で肉棒をむにゅむにゅと玉袋と男根の根元を摩るように上下に動いてしごきあげる。

「んくろろろろろお（オウ、コレが欲しいデース。もつと私でエレクトして欲しいネ）」

「んん、はあむっ、じゆるじゆるくyeah……ああん……ああんツ、んっ、んツ！」

金剛は再び熱を帯びた俺の肉棒を胸に挟み込むと……射精後もただひたすらに、いとおし

そうに肉棒にむしゃぶりついてくる。

「んっ、んっSo、イエス、イエス、イエス……」

「はあむ、ちゅくちゅばツちゅばツちゅば……」

（ああ、女性が男性器を啜えたくなるのは『女性の本能』なんて昔、兄さんが大和さんとの寝屋で言っていたが……頬を赤く染めた嫁が

たまらなくなつて愛しいおチンポを求めて無性にしゃぶりついてくる光景は……こんなに興奮するものとは思わなかったな……ああ）



「ああ……あッああ、ふう……はあむ、んん……」  
戦時下だからなどと称して、自分の秘書艦に芽生えたこの劣情じみた感情を隠しながらの長きに渡る生活は……確かに辛くもあつた。

俺は……昂ぶった肉欲を沈めるため、万感の思いで金剛を英国式のベッドへと押し倒す。

そして、そのまま金剛の下半身に手を這わすと……指先に触れるヌチュリと滴る愛液のヌメリ。我慢のできぬ金剛の瞳からあふれ出す愛液が……パンツに大きなシミを刻み込む。

秘所から湧き上がるムワツとした熱気と甘い香りが俺を誘い……均整の取れた美しい肢体にその身を割り込ませる。

艦娘という『戦う運命を与えられ、生み出されし神聖な身体』と交われるという背徳感に思いをはせただけで……俺の体温は上がり、下半身にも熱き猛りが戻り始めていた。

大義名分で虚飾された道徳など……この肉欲の前にはもはや介在する余地など無かった。

金剛は……まだ男を受け入れたことの無い自身のつぼみを指で散らすまいと、目の前にある肉棒を眺めながら……ゆっくり、ゆっくりと秘裂に指を入れながら解きほぐしていく。

（ワァオ……私の目の前にそそり立つ、提督のオチンポ……太く……重く……猛々しいネエ……

ゴクツ、改めて見ると更にスゴいデース……）

「アツ、はあつ、ああ、ああ、アア〜んツ」

俺は粘性の強い肉棒の先走り汁を……筆を描くように金剛の胸の谷間に擦りつける。

「ああ、これはとても恥ずかしいデース……」

「あつ、はあ……ああ……ああん、たぶんつ、にゅぶツ……はああ……ああいいですか提督？」

ぐりゅん、ぐりゅん、ぐりゅん……

クチュ、クチュ……

「ああ、んんあ、ああ……手が止まりませ〜ん」

始めはその羞恥的な行為に恥じらいを隠せずにいた金剛であったが……その態度は次第に軟化・より淫らになっていく。

俺は着物の上から強く乳房を掴み、指先で乳首をこねくり回しながら……布擦れの音がするほどに激しく金剛の胸をまさぐり始めた

金剛は脚を開きながら、切ない股間を慰めるため、もじもじと尻と腰を動かし……パンツと指のわずかな布擦れに思いをはせる。いや、むしろその仕草は……山本の性欲をエレクト

させるには十分すぎる効果があつたようだ。

手を食い込ませれば跳ね返る弾力をもった若々しい金剛の乳房。肌は絹のようなきめ細

やかさと繊細さで掌に張り付いてくる。

（二体何なんだ……あの紅茶を飲んでから……

身体が熱くて……ああ艦娘を抱きたいッ！！）

「すまん金剛、前戯はロマンキャンセルだ」

「OK。では提督う……さつそくワタシと『レッツ♪ファイナルフュージョン』デース」

シンメトリカルウウウ……ドッキング……！

すでに激しく昂ぶった山本 五十六のマスラオはとつくの昔に準備万端ッ！整っていた。

……あとは、前戯によって火照った金剛の

『ほど』への挿入を待つばかりであった。

「さあ……い、いくぞ！金剛、覚悟はいいか？」

「Hey、テートクウ……フォロミー♪私に『突いて』来てくださいネ〜♪oh、ya〜」

期待と不安が入り混じりながらも、金剛の吸い込まれそうな瞳に……最早、抗う事は出来なかった。俺は金剛の脚を持ち上げ……大きく彼女の股を開かせた。捲りあがったスカートで丸見えの下着の奥では愛液が糸を引きながら溢れ、滴り零れ落ちた愛液がスカートの上に大きなシミを作り上げていた。

マカピンピンEXによる催淫作用も手伝つてか……挿入の期待で膨れ上がった山本の剛

棒もとい主砲に金剛は手を添えると……それを下着をずらした自身の股間へとあてがった。

そして、山本は熱く火照った秘肉の奥へ

と……その猛った棒を押し込んでいく。



プチッ……という僅かな抵抗の後、締め付ける肉壁を掻き分けながら……俺の肉棒は戦乙女たる金剛の奥深くへと入り込んでいった。

「んっ……Shit!、ああん……んああ、ん、くふう……い、inサイドミッ♪オオウッ痛い、痛いのに……ああく凄く気持ちいいデース♪」

金剛の陰唇に突き立てられた俺の熱く屹立したたくましいその砲塔が……処女膜のもたらす僅かな抵抗を感じつつも、それを突破す徐々に進行し……深く、深く埋没されていく。

ジュブブ、じゅぶん……

「ふあく入って、ペニスが入ってきたヨッ！」

「おおう、はあ、はああん、あくんっあんッ」

噛み締めるように声を漏らす金剛は、背中をのけぞらせながら……その突き入れられた肉棒の全てを必死に受け入れようとしていた。

「アア……深い……熱い、熱いデース……まるで、

『焼けた鉄の棒』をねじこまれてるみたいネ」

「ははっ、お前の中の方がよっぽど熱いぞ？

俺のをドロドロに溶かそうとするココはまるで溶鉱炉だ……英国式のボイラーはすごいな」

被瓜の痛みが治まった頃……金剛は、内ももに覆われた肉壁を総動員して山本の剛直たるモノをキュウキュウときつく締め上げ続けた。「オウツ、イエース……提督のハートを掴むの

は……私デース♪んんん提督のためならあくハア、ハア、このまま存分に……提督のスペル

マをここに解放してください……ひやああん、あん、んああ、あくんッああ……、あん、あんっ、はあくああん、はあんああああ

俺は金剛の胸元の着物を押し広げると……そこから解放されたおっぱいが熱い吐息と連動してブルン、ブルンと激しく暴れまわる。

俺は激しく暴れるおっぱいを手に取ると、慎ましくもはりのある胸の膨らみにそって丁寧に色を染め上げた乳首の先端に吸い付く。

「ああ、はあああん……Hey!カモオン!!!

アア、はああ……アアンアアンッ、ハアハア……」

金剛は腰を突き出され、乳房を揉まれ、乳首の先端を舌で刺激させながら……体の奥より沸き上がる快楽の絶頂を必死に耐えていた。

「あくああ、奥の方が熱いデース……オウツ

ああ、奥が何か変、なんか変だヨッ……アアン、

ハア、なんか出ちやう……ああ、来るデース♪」

プシャー……びゅッ、びゅるるッ

絶頂被弾……金剛中破

『棒倒し大会』では、艦娘が絶頂を迎える度に装甲にダメージがいくようになっていく。快楽の限界を超え、チンコによって墮とさ

れる『轟チン』を迎えれば……提督が射精していなくとも試合は終了となってしまふのだ。

(初挿入で潮吹きか……こいつは楽しめそうだな)「oh、ソーリー提督……次は私のターンネ」

そう言うと金剛は……損傷した装備を脱ぎ捨て、俺の上に馬乗りになって跨ってきた。

「Hey、提督……これ気持ちいいデースか？」

金剛は頭の後ろで腕を組み、下半身だけのバランスでリズムカルな上下運動を展開する。

俺もその動きに合わせて腰をグリグリと股に押し付け……お互いの力で肉棒を膣の最奥に侵入させようと押し込んでいく。

「アアン……ハイ、それ……ワン・テュッ♪ワン・テュッ♪おやおやく？私の中で提督のがピクピクしているのが分かりマース♪さては提督……イキたがってるんデースかあ？」

俺は挑発的な金剛のドヤ顔を見つめながら、ただただ無心に腰を上下へと突き上げ続けた。

パンパンパンツ、パンパンパンツ

パンパンパンツ、パンパンパンツ!!!

「YESッ、オオウ、ファックミッ、アアン、

ハア、ああっ、はああ……ひいッ、あっ、あ……

アアン、アアン、アアン、アアンッんんッああッ」

「オオウ！イエエエスッ！カモン提督ウッ！」

パンパンパンツ、パンパンパンツ





ア  
ア  
ア

ア  
ア  
ア

[Redacted]

[Redacted]

ア  
ア

ア  
ア

ア  
ア

ア  
ア

ア  
ア  
ア

ア  
ア  
ア

ア  
ア  
ア





「おお……イエエス、イエス、イエスツツ!!  
Hey、カモオン……オオウ、あんあんアアン」  
すでに彼女は、淫靡な快楽の虜となつてい  
た……生殖という生物の根幹をなす動きは実  
に多弁だ。彼女の心と身体が……今まさに一つ  
の目的に向けて動き出そうとしている。

それは心身同体の境地……溶けあい、混じり  
あう。絶頂という沸き上がる欲望を抑える事  
も無く、俺も射精に向けて激しく腰を振った。

「ああ、あいえ、あいえ、あいえツ……アんツ!!」  
タブンツ、タブンツと激しく胸を揺らし……

金剛のあえぎ声が甲高さを増していく。金剛  
はぎゅつと枕を掴みながら……下半身から脳  
天へと突き抜けるような快感に耐えていた。

「ふああッ、ああん……私なら平気だよ……」  
ホラ、ホラア……提督も……もつと気持ち良  
なつてネエ……ハア……ああん……ああん、あん  
アン、アンツ……キイピングくるうう……」

俺も金剛の英国仕込みの情熱的なテンショ  
ンに圧倒されながらも……叩きつけるかのよ  
うに腰を秘部へと押しつけ、金剛の声が抑え  
られなくなるほどの快感に身を焦がした。

「NOオ……激しすぎマ……はあくあ  
アイエ、アイエツ、アイエエ、アイエエエ……」

ああッ、ハア、アンツツ、こんな格好は……

ああ……ん駄目だから……もう、我慢できないヨ」

正常位から山本に抱きかかえられ……金剛  
は深い挿入感に気を失うまいと山本の首に手  
を回す。そして、本能的に顔を近づけると懇  
願するような熱い瞳で耳元に問いかける。

「へえ……いい、提督うのおくデカチンポで擦っ

てえ……硬いチンポでこすつてえ……はあん、  
あんツんあつ……チンポ、チンポ、ちんぼ……」

♪……ああん、So、ドイツク、ドイツクツ、  
ドイツクツ……ああん……大好きなの……も  
う……だ……い好きだよ……！……テ……トク……う……」

金剛の体が折れ曲がるくらい強く、全体重  
を込めて腰を上から下に突き降ろす。

日本のプレス製版技術の発展を思わせるが  
如き、山本の激しい孕ませプレスによって……

ベッドがギシギシと音を立てて軋む。

しなやかな金剛の肢体が山本の体を受け止  
めマットレスの中に沈み込み……それを山本  
が金剛の太ももを抱えることで引つ張り上げ、  
さらに深い挿入感の子宮口にあたえていく。

ずちゅ、ずちゅ、ずちゅ……

パンパンパンパンパンツツ!

「アア、So……dick、dick」

「ああんつ、Soマツチdick、提督のべ

ニスが……私のアソコにビツタリなのデ……

ス……!んつアア、はあああ、私の方も、もう……

腰が気持ち良すぎて……止まらないヨ……!」

ばんつ、ばんつ、ばんつ……!」

ずちゅんツ、ずちゅんツ、ずちゅんツ……!」

「イク、イクウウ……Ohウ、カア……ミンツ……  
ああ、イク……う……イキマア……ス……全部、一滴  
残らず搾り取るヨ……ああ、全部、私の中に……」

ビクビクツびゅくつ、びゅくるう……!」

「ああ、出てるう……テ……トク……の濃厚ス……ペルマ  
が……私の中にそそがれてマア……ス……ああ、出  
してえ……オオ、もつと出して欲しいネエ……

ああ……私の中……まだまだ足りないヨ……!」  
膣の最奥まで挿入すると同時に……山本の

『いちもつ』は膣内でビクビクと振るえ、そ  
の先端から濃厚なゼリーのような精液を金剛  
の子宮口めがけて噴射した。

ドビュ、ぶびゆるる……!」

先程まで生娘であった艦娘の動きとは思え  
ぬ金剛の妖艶さが……俺の欲情を昂ぶらせる。  
(ハア、ハア、それにしても……あの金剛のどろ  
けきった顔。もう高みに昇る事しか考えられ  
ないって女の顔をしてるよなあ……ゴクツ)

そのあまりにも扇情的で淫らな光景に……  
山本は思わず生唾を飲み込むのであった。



「ああ、おおう……提督のデカマラ dick で貫いて欲しいデースああん、ハア、ああん、ああ、もう我慢できませ〜ン♪ああ〜いい、イイデース♪ソ〜カア〜ミン、おおう……カア〜ムイン、ああ、さあ来てくだサーイ提督うワタシのナア〜カにいくひやああああんツ」  
(Oh, SEXってこんなに凄いですネ……)  
金剛はギュッと頭の後ろで手を組みながら、山本の性を搾り取るため……荒々しい腰使用と共に前髪のツインテールを振り乱す。

「私が満足するまで何度でも射精してもらいま〜ス♪ああん、ああ……す〜いデース……提督のオチンポは……何度膣内に射精しても膣に入れればすぐに大きくなりマ〜ス……うっうん、それに入れれば入れるほど太くて硬くなっていくのが分かるネ〜オウ、ビッグワン」  
「あれだけ射精してまだ満足できないのか？フフツ、まったくこの欲しがりさんめ〜♪」

あれから一体何回……俺の性を金剛の子宮奥深くに解き放つただろうか？

精力剤入りの紅茶は二人でとうの昔に全て飲みきり……金剛の下腹部には俺がぶっつけた精液でヌラヌラと淫らな輝きを放っていた。  
二人の結合部からは、膣から零れ落ちた精液と愛液の混ざり合ったモノでベッドのシー

ツももべちやべちやになっっている。

「もつと、提督にオマンコされたいデース♪」  
ホント、俺の金剛がエロすぎて……彼女の性欲が有頂天でとどまる事を知らなかった。

「んああ〜、んはあくあく〜ん……出してえ〜……もつとっばいオマンコに出して欲しいデース♪んああ〜はああん……ああ〜ん」

だが悲しいかな俺も男なのだ……金剛の中に深々と埋没させたその「いちもつ」はウネウネとした膣内マッサージによって簡単にその硬さを取り戻し……鍛え上げられたその砲身はすぐにまた激しく金剛の中を出し入れさせ……性を放つ。パンパンツと肉と肉のぶつかり合う乾いた音と、射精後にちやぶちやぶとといういやらしい水音が部屋全体に響きわたる。  
「んアアアア……出てる……また出てマ〜ス♪」

俺は金剛の腰を両手でガツシリと掴み……噴出す精子を最後の一滴まで膣内、いや子宮の奥深くまで送り込むために……射精後も腰の前後運動を続ける。それでも「いちもつ」から放出された膣に収まりきれない大量の精液が……陰唇から愛液と共にあふれ出す。

その動きはまるで、膣内に残った精液を子宮内に無理矢理押し込むかのように、膣最奥へのノックを何度も何度もおこなった。

トクン、トクン、トクン、トクン……

金剛は自分の最も深い場所に響く音に高揚しつつ、愛する提督からの中出し膣ノックという現実には戸惑いながらも……頬を赤く染める。じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ……ジュブンツ  
「フフツ……気持ちいですか提督う〜？ああん……はああ、やああ……んんツ出してえ〜もつとっばいオマンコに出してえ〜……ひやああ〜、ああん、あああ……はあああんツ」  
どびゅつツ……どびゅつツ……

「ひやあああツツ……ああん、ああ、ハアハア」  
ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ……  
射精して尚、律動を持って上下に腰を動かし始めると……それに合わせて金剛の膣内も収縮を繰り返し、まるで俺の精子をすべて子宮内にも搾り取ろうとするかのように……腰の上下運動を繰り返した。

「Oh、ああ……ウフフツ、もうおしまいで〜スカ提督う〜？もつと、私のオマンコをいじめてヨ〜♪ああ、もう我慢できませ〜ン。私の子宮が、子宮が提督の……ダーリンの子種を欲しがってるのデえ〜ス。ああ〜んはああツ」  
それは熟練の娼婦のような圧倒感さえ漂う妖艶さを振りまいていた。色っぽく美しいその姿は、ただ一人の女そのものであった。



金剛は山本が精をほとばしってから休む間もなく……悶えるように腰を振り続けた。彼女は近代化改修で教わった通りに……いつまでも、いつまでも永遠に精をねだっていた。

そんな金剛も次第に声が途切れ途切れになつていく。頂点に近づいている証拠だ。そして、俺のモノも本日何十回目かになる射精に向けてひっきりなしに震えだしている。

絶頂へと向かう為の最後の振動……

「あつ、あつ、あつ、あああああんツツ……うくつ……ああ、はあつ、はあああ……いやああ、いやああ!!ハア……ハア……ハア……」  
切なそうに腰を掴まれながら騎乗位で出しされる事を期待しながら、蕩けきつた表情で腰を激しく前後させ、ヘビの如く絡みあう激しいセックスをみせる金剛。

「ちんぽっハア、ちんぽお、ちんぽお、ハアハア……もう私……ちんぽ無しじゃく生きていけないヨ……ッああ、あつ、やああくん」  
どびゆるツツ……どびゆるるるるるッ……

——ああ……ようやく届いたネエ——

俺が最後の射精を迎えると同時に……  
突如、金剛の身体が光り輝くオーラのようなものに覆われ始めると……それまでの金剛の姿が徐々に……変化していった。

『マキシマム・システム』

オーバー・ドラァアイブツ!!

『最大級のマシユマロボディ』

マキシマムパワ〜♪おっぱあ〜い♪』

謎の歌と共に現れたのは……今日、鎮守府で出会ったマシユマロボの金剛改二であった。  
「HEY提督ウ〜ようやくこの姿に戻れましたデ〜ス♪もつと、もつと、いっくばい私に精子をかけてくれないとNOですヨ〜!!」

「ああ〜いや、なんか……スマン」

どうやら、金剛の俺へのアカウント受領はとつくの昔にされていたようで……改二になるためのオーバードライブを使用するエネルギー(精子)が足りてなかっただけのようだ……  
「……これでやっとなげと結婚できマ〜ス♪」  
「ああ、そ、そうだな……じゃこの辺で帰……」  
「では……まずは誓いの挿入からデ〜ス♪」

そう言う爆乳金剛は俺の上に跨ってくる。

「ちよ〜つと待ってッ、ちよ〜つと待って……」

(流石にあんだだけ射精した後では……いくら何でももう起たんよ金剛……ってあれえ〜?)

「NOッ!!タイムイズマネー!!、制限時間」

間は3分しか無いのデ〜ス。3分間で……もつと提督とセ〜ックスをいっばいするのデ〜ス」  
(なんだ?俺の脳裏に金剛の考えてる事や情

報が入ってくる……これが『棒倒し大会仕様の金剛』にログインできたってことなのか?)

確かに金剛の意識の中に大きな砂時計が『テケテケテケテ……』と時を刻んでいた。

(これが活動限界の3分間を知らせてくれるのか……なるほど、そして俺も金剛と繋がった事によって……俺にもオーバードライブ状態の効果ファイードバックされてるって事か)

なんと……さつきまで萎えていた俺の肉棒もマキシマムな斬艦刀へと変貌を遂げていた。

「よし、それじゃ始めるか……」

究極の3分間ってヤツを……!!

「おお、いえ〜す♪ガンバリマ〜ス♪」

ふるん、ふるん、ぼよん、ぼよん♪

「アア〜おお、気持ちいいですか提督?」  
目の前で『ぼよん、ぼよん』と跳ねる金剛の胸はまさしくむしやぶりつきたくなる様な……つきたての餅そのものであった。

白くまるみをおびたその形に、男は本能的に吸い寄せられてしまう性なのであるうか?

俺は羽織から丸出しになったおっぱいを揉みしだき、まだ乳首の勃起してない乳房を、ゆっくり、ゆっくりと揉みほぐしていった。

すると、徐々に乳首が固く勃起し……その先端は次第に尖りを作っていく。







oh...

入ったデスネー♡

ズキキ

もちゅ

ぷるん

ぷるん

ズキキ





oh...  
Yes!!

かまろ♡

A-I-I

A-I-I

A-I-I♡



アイ♡

Yes!!

アイッ!!

AP

A

A

AP

アッ

アッ

アッ

アッ

アッ

アッ



Eya~...

Oh

AA...

AA~

AA~♡

「それじゃ……次は後ろから行くぞ金剛……」

スパンキン、スパンキン、スパンキンッ！！

突き出された金剛の大きな尻を叩いてやる  
と……誘うようにフルフルと小さく揺れた。

「ワアオ……ワタシのシェイク・ヒップがあ……」

「尻を叩かれて喜ぶ趣味があったのか金剛？」

「お尻がかあくとなつてぼおくのデウス♪  
こんなふしだらな私にお仕置きして下さい」

「ええ……い、こうなつたら……股からバナラク

リームを吹くまで腰の動きを強めてやるッ！」

パンパンパンパンッ、パンパンパンパンッ

「アウッ、アウッ、アウッ！！」

ずんずんずん！！ズンズンズンッ！！

大きくモチモチなお尻をこねまわすように  
弄びながら……俺はその要望どおりに、熱く  
猛々しい自身の斬艦刀をバックから……金剛  
の熱く熟れたそのオマンコへとぶち込んだ。

「EyaーOh、ああ……は、入ったヨ、

提督のおチンチン、また入ってきたデウス♪」

俺は激しく腰を打ちつけ……金剛のしつと

りと……それでいてむっちりとした弾力のあ  
る太ももに下腹部を叩きつけた。

パン、パン、パンッ……、パンパンパンッ

「あつ……ふあッ、あ、ああ……はああん……」

「はあんッ……くううううッ、ああ、んんッ……」

「はあッ、アア、フアックミ……あああんッ！」

重力に引かれ……釣鐘のように揺れるふわ

ふわなマシユマロおっぱいを、俺は後ろから  
抱え込むようにして抱き締める。それはしつ  
とりとして……じつにエロかった。

「NOデース……もう止まらないネ。ああ、

だめえッ……駄目デウスッ……これ、感じすぎて

すごく……気持ちいい、気持ち良いのおく♪」

パン、パン、パンッ！

「んああ……あんッ、ああん、ああんッッ」

ずんッ、ずんッ、ずんッ……ピクッ、ピクッ

ピクンッと……俺の肉棒はいつでも射精して  
しまいそうな脈動を続けたが……金剛のム

ツチリとした肉厚のお尻を抱え込むようにガ

ツチリとホールドし、腰を打ちこみ続けた。

「あつひい、ああんっしゅ……おいしいっ！！

提督のおチンポ、私の中で暴れてマウスッ！」

ばんっばんっばんっばんっ……

ジュク、ジュクッ、ジュクッ……

じゅぶ、じゅぶ、じゅぶッ……

ズチュッズチュッ……

「ああ、しゅ……いつ……ああ、んっぐうう……

あんッ、でゆう、出りやう……出ちやううう」

びしゃッ、びしゃッ、びしゃあッ……

「No……止まらないネ……ああ、あふれて……

私の中から何か……何か出てきちゃいマウス」

もじもじと太ももを擦り合わせていると、

陰唇から太ももにかけてビシャビシャと大量  
の透明な愛液がったい落ちていく。

パンパンパンパンパンッ……

大きく、もてあまし気味のおっぱいをシー

ッに押し付けながらもぶるん、ぶるんッと揺  
らし……いやらしくあえぐ金剛の姿に、俺はも

はや興奮を抑えきれずにいた。

がくがくと腰が起たなくなるほどに尻を前

後に振り、金剛からは熱い吐息が漏れ……俺の

マラ棒にからみつく膣のヒダがキュキュッ！  
と性をねだるようにきつく締め付けてくる。

俺も腰使いがいつそう激しくなり、挿入の

速度がどんどん速まっていくのを感じていた。

ぬっぶぬぶ……ぐりゅんぐりゅんぐりゅん

パンパンパンパンッ、パンパンパンパンッ！！

パンパンパン、パンパンパンパンッ

「くあああッ出るッッ金剛……出るッ」

ピストン、ピストン、ピストントン……

ピストン、ピストン、ピストントン……

一定のリズムで繰り返される腰の動きと尻

肉がぶつかり合う乾いた音が部屋中に響く。

俺は後ろから腰をガツツリと掴みながら金

剛にガンガン種付けピストンをしまくった。

「ああ、出ちやうツ、なんか出ちやうう〜！」

「はああああ…ああ、出してツ、中に出して  
くださ〜いい提督ツ！！ああ…ああツ、いつ、  
くう…らめえ、カアムツ、ああツ、ああ！！  
いっくう…イクツヨお、はああああん！！」

「うっ…くっ、うおおおっ！俺もイクぞツ！  
金剛の身体はピクンつと脊髄反射するかの  
ように仰け反りながら跳ね上がる…俺は臆  
奥の肉壁を突き破らんばかりに突き上げた。

んツ、ンツ…ピクツ、ピクンツ！！

びゆく、びゆく、びゆくツ…

パン、パン、パン、パン、パンツ

「ああっつ…イクあつあつあつ…！…！…！  
イクツだめ、もう、だめ、ダメえツ！！」

「アツ…アツ…アツ…」

パンパンパン、パンパンパンパンツ！！

「ああ…イキマ〜ス…イクツ、イクうツ！」

パンパンパンパンパンパンパンパンツ！！

パンパンパン、パンパンパンパンツ

「んああ〜つ、はあ、イツツSoカアミング、  
出してく〜ダサア〜イツツ！！私もイク、イ  
くヨオお〜ハアアアン…はあああ〜んツ」

どびゅっつっ♪どびゅううツツ！！

「くあああああつ…あああん、はああ〜ツ」

どびゅ、どびゅっ、びゆるびゆるるるツ！！

「ああ、じゅ、受精してマ〜ス…ふあつあつ

ああつはああ…出てましゅツ、種付けされ  
ていきましゅうう！！ひやあん！おつきい  
くて熱くて…気持ちイイのお〜！！」

俺の萎える事の無い剛直は…金剛のどろ  
どろに熟した性器に精液をたつぷりと叩きつ  
けながら…彼女に子種を注ぎ込み続けた。

「はああむ、っん、ペロツペロツペロツ…」

金剛はいとおしそうに自身と繋がっていた  
ザーメンまみれのチンコを舐め回していく。

そして、射精を促すようにその豊富な胸の  
谷間で肉棒をはさむと…むにゅ、むにゅ♪

ずりゅ♪と形を変えながら男根の根元から竿

をこするよう上下に動いてはしごきあげた。

「ん〜、あとタイムリミットまで…まだ三十

秒くらいあるヨ〜もう一回射精させマ〜ス♪

ん〜提督の紅茶が飲みたいネ〜…んふう〜  
食後のティータイムは大事にしないとネ〜♪

はああむ、じゆるじゆる…んっんっんツ！！

熱を帯びた僕の肉棒を再び根元まで深々と  
啜えこみ、金剛はただひたすら…愛おしそう

に肉棒へとむしゃぶりついてくる。

「んっ、んっば、んば、ちゅ〜ちゅばツ♪」

「はあむ…はあう、ああむ…んっんっんっ  
んツツ、じゅぶじゅぶ、じゆるじゆるじゆる」

あれだけの激しい行為にあえぎ声をひつき

りなしに発し、何度も精をねだりながら身体  
の感じる箇所を隅々までもまさぐられて…  
金剛は恍惚とした表情さえも見せている。

（無尽蔵に精を吸い尽くされそうな恐怖まで  
感じた。これがオーバードライブの力か…）

永遠のように感じた3分間を終了する

と…オーバードライブの力を使い切り、元の  
姿に戻った金剛は脱力し…身体を折り曲げ

ながら静かに瞳を閉じた。俺も虚ろに天井を

見上げながら静かにベッドへと横たわる  
と…ぐったりとその身を預けていた。

「そして、最後に使用上の注意点だが…スー

パーモードが3分を超えてしまった場合につ  
いて説明しておこう。これは経験値にある一

定の負荷をかける事で一時的に爆発的な力を  
得ることができるシステムだ。だが、それは

逆に全ての力を3分間で使い切ってしまうと

いう事を意味している。全ての力を使い切つ  
た場合…そのすべての経験値は失われ、金剛

は『レベル0・ゼロ』となってしまうのだ。

『レベル0』とはまさに『無の力』…その容  
姿も、何も知らぬ年端のいかない幼女の姿と  
なってしまうだろう」



ピュルル...

ドク...

ドク...

Yes... oh

ドク...

Fuck me...♡

ドク...

ドク...

A P

「らめえく提督に捧げるはずの処女膜があく」

「ムハハハ、いい格好よのおくええ金剛よ?」

幼く変貌した金剛を持ち上げ、まだ膨らみかけの胸元を露出させながら……大きく股を開かせた金剛の幼女マンコに東郷の剛直が金剛自身の重みで深々と突き刺さっていく。

「ムハハ、処女にまで戻ったあやつ金剛とこうして『まぐわえる』とは……ソクソクする」

そう言うと、東郷はリズムカルに勃起した肉棒を金剛の奥深くに向けて突き出した。

「あああつ提督う提督に貰った大切な装備が」  
「オウ、な、何なのデウスかコレは……!?!」

「あ、あん……イヤアア、ああんツ、NOオウ!!」  
パンパンパンツ、じゅぶ、じゅぶ、じゅぶツ

「……おおうカクミイン……アア、かき回されて……ああ、また、イツちやう、イクヨオツツ」

「おうイエス、ああアアン、はあ、ああ……」  
「らんめえくツ……もう、らめえく……!」

「では……このまま種付けさせてもらおうぞツ」  
そう言いながら、東郷は金剛を前から抱きかかえると……駅弁ファックの要領でエレクトさせた男根を金剛の秘裂にじゅぶじゅぶツと激しく何度も挿入していく。

ドク、ドク、ドク……

「NO、ああ嘘ツいやあ……何か出てきたヨ、

ああん、いやあつ、いやあつ、イヤアアアツ」

「ムハハハ、安心せい……ウヌの精神が壊れる前に、全て臍内に吐き出してくれるわあ……!」

ギシギシギシ……ああん、あん、ああん……」  
「閣下は随分と激しくヤってるみたいだね」

「……いたしかたあるまい。東郷元帥の性欲暴走を受け止められる艦娘はそうそうおらぬ。

ましてやあの『山本の嫁』ともなれば……犯しがいもあるというもの。吾輩も疼いておるわ」

「フツ、ロリコンの貴殿にはたまらないであろうが、私はやはりあの『スーパームード』

とやらの爆乳を堪能したいところではある」  
「ぶうつ僕は絶対あんな『ヤリマン』より

『処女』のほうがイイと思うんだけどなあ」  
「時には処女より傷物の方が価値があるって

事もあるのよ。ま、私はどっちでもいいけど」  
「ああんツ、やあ、オオウ、はあくん、アア」

どびゅツ、どびゅツ……! ドブツ、ドブツ……」  
「うわああツ……!……ハア、ハア……夢か……」

俺は夢の原因……ピデオメッセージに残されていたエドワードの言葉を思い出していた。

「そんな耐性の無い彼女が、スーパームードを耐えきった男の剛直に耐えられるはずもない。恐らくすぐに轟チンされてしまうだろう……この事をゆめゆめ忘れないことだ山本

提督。スーパームードは諸刃の剣だ……何としても3分以内に敵提督の棒を射精によって倒すんだ。それ以外……君達に勝利する術は無い」

(ああ、分かっているさ。俺は必ず勝ってみせる兄さんの無念と『こいつ』のためにも……)

「んく提督う激しすぎマースむにやむにや」

「会長、これでよろしかったのでしょうか?」

「構わんのだよ黒崎……願ってもない事だ。艦娘とは……個体差こそ面白いのだから。新たな

金剛の姿、それによって示される艦娘達の更なる進化……フツツ、それでこそ『深海棲艦』

を海に解放放ったかがあるというものだ。

それに……人は始めることはできても、終わらせることはできない。東郷君がそうであったように……あの山本君でさえも、終わらせようとして始めている……人の性に終わりはない」

「にしてもいいのかい閣下? アイツは昔からヤケになると何をしかすか分からないよ?」

「まあよい……あやつがどのような小細工をしかけてこようが構わぬ。我々の最終目的である『伊東計画』の妨げになるようであれば……このワシ自らの『肉棒』で潰すまでだ」

後半に続く





